

原爆ドームの内部。補強鉄骨で倒壊を防いでいる。7月29日午後、広島市



被爆の惨禍を伝え、「平和の象徴」として保存されている原爆ドーム。1996年、世界遺産に登録された。7月29日午後、広島市

原爆ドーム 本紙記者ルポ

平和の象徴 歳月を重ね

広島市中区の平和記念公園内にある世界文化遺産の「原爆ドーム」。1915年に広島県物産陳列館として完成し、ことし100年を迎えた。核兵器廃絶と平和への願いを国内外に伝え続ける「ヒロシマ」のシンボル。国内ジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」に参加する中で、普段は立ち入れないドーム内部を見学する機会を得た。被爆70年の今も当時とほぼ変わらぬ姿を残すが、確実に劣化が進んでおり、保存の難しさとともにドームへの市民の思いを実感した。(文・写真 横松敏史)

進む劣化、保存に苦心

とちろぎ
戦後70年
広島から

半球形の屋根を真下から見上げると、頑丈そうな鉄骨が目につく。交差して並ぶ鉄の支柱。倒壊を防ぐ補強が歳月をうかがわせる。7月29日、原爆ドームを訪ねた。ヘルメットを着用して建物内へ。案内してくれた「ピースボランティア」の高齢の男性が言った。「いろいろ知識はあると思いますが、まささな気持ちで見てください」

原爆ドームは爆心地から北西160㍎の距離で被爆。その後、約20年間はそのまま放置された。「記念として残す」「悲惨な思い

え方を変えず保存を進めるが、完全な倒壊防止は困難な面もあるのが実情という。万一の事態に備え、同市は復元を可能にするためのデータも集めている。担当

職員は「可能な限り、長く残したい」と強調する。周囲はがれきが地面を覆い、崩れかけた壁のれんがが当時を物語るように見える。実際にその場に立ち、市民の言葉を聞いて、ドームの存在の重みを感じた。「ヒロシマ」の思いを後世につなげるため、同市は本年度中にも4回目の保存工事に着手する予定だ。

出につながる」。存廃で意見が二分したためだ。保存に傾ききつかけになったのは、1歳で被爆し15年後に白血病で亡くなった楮山ヒロ子さんが残した8月6日付の日記だった。「あの痛々しい産業奨励館(原爆ドーム)だけが、いつまでも、恐るべき原爆のことを世に訴えてくれるのだろうか」

その言葉に心を打たれた子どもたちが中心となり、保存運動が始まった。同市は67年以降、3回の本格的な保存工事を行った。原爆ドームの外観や見